

ごあいさつ

本日は「文芸サロン・冬の句会」でお茶体験をさせていただきますこと、
 ありがとうございます。いろいろ伝統文化が失われていく中、この茶湯の文化も
 残念な状況になっております。私がお茶を介した一時の空間を共にすることが
 無限の精神の自由を得られるように思います。
 茶湯の確立をなした 400 年前の利休さんに思いをはせ、ゆるりとお過ごしてください。

本日のお茶の会の趣向

(趣向を説明するのもなんですが、)こうした句会も日常の中の非日常、
 この静かな彩翔亭で、風の音、湯の沸く音を楽しみ、この空間を一緒に
 楽しんでいただけたら、と思います。
 やや型通りの進行を取り入れましたが、茶湯の演出をリラックスしてお楽しみください。

進行のせつめい

・主客と連客——主客(お正客)を決め、それ以外の方は連客になります。
 お正客は亭主の点てたお茶を飲みます。せりふのやりとりがあります。
 連客には、奥から点てたお茶が運ばれます。

・総礼と一礼
 全員で礼をするのが、「総礼」で、個別に礼をするのが「一礼」です。本日は、
 総礼は、の時は声をかけさせていただきます。
 一礼するのは、①「茶室に入ってから」②床の間の拝見前と後 ③お菓子が前
 に来た時 ④お茶が前に来た時 ⑤お茶碗を下げる時 などです。

・礼について
 礼——座ってのおじぎには、3種類あり、真の礼、行の礼、草の礼と言われてい
 ます。書道や生け花などと同じく、真の礼は、深く、行の礼は真よりも角度が浅
 く、草の礼はもっと浅い礼になります。上記の総礼と一礼は真の礼と行の礼を使
 い分けます。本日は細かく使い分けなくてよいと思われます。

・席入り
 席入りは、茶室の前で扇子を前にして手をつき、部屋のなかを、ざっとうかがい
 ます。(ここでは礼をしません)
 扇子を右手で持ち、茶室の中には、にじって(両の手を握りこぶしにし、両側につ
 き、膝を進める)入ります。
 体が入ったら、扇子を膝前に置き、主客に向かって一礼をします。(このときは、
 あまりじろじろ見ません。ご一緒させていただきます、というような気持です。)扇
 子を右手で持ち、床の間に向かって歩きます。よく量の縁(へり)を踏まないよう
 に、といわれますが、これは縁が傷まないようにという、心遣いです。

お茶碗のご紹介

本日使用のお茶碗と作者の紹介
 (使用しなかったものや、別のお茶碗を使
 うことについては、おゆるください。)



赤楽
 佐藤笑喜 (清瀬市)



黒織部
 黒澤有一 (秩父市)



工藤和義 (北海道、旭川) 赤
 色は帆立貝と焼いているため

・床の間の拝見

床の間の30センチくらい前に座り、扇子を前に置き、見る前に一礼します。顔を上げて掛け軸を拝見します。次に縁周りを見ます。花を見ます。花器を見ます。最後にもう一度掛け軸を見ます。(なごりの拝見、と言います。)

一礼して、扇子を右手で持ち、立って、自分の席に向かって歩きます。本日は座る所に座布団を置きました。

お茶席によっては、お釜の拝見などあることもあり、前の人に習ってします。



岡田崇人
(益子/所沢市出身)

・着席

畳の縁から8目のところに静かに正座します。膝前はテーブルにあたり、ここにお菓子やお茶が置かれます。扇子は後ろに正客は手を右に、連客は手を左に置きます。(流派によって扇子の置き方が違います)お客様が入るたびに扇子を前に置き、一礼します。全員が席に着き、亭主(お茶を点てる人)が、あいさつし、道具を2回に分けて運び入れ、柄杓を釜の横に置き、総礼(全員が礼をする)するまでは、正座のままで、あとは、お茶が出てきて一礼するまで、適宜くずされてもいいかと思ひます。お茶を飲み終わり、最後の総礼まで、またくずされてもいいと思ひます。



岡田崇人
(益子/所沢市出身)

・お点前

亭主が茶道口でご挨拶します。最初にお道具をもって茶道口で礼をするので、これが開始の合図となり、総礼します。お道具は2回に分けて持込み、釜の横に柄杓を置いたら、総礼し、進行します。



西村圭介 (日高市)

・お菓子

人数分のお菓子が入った食籠(じきろう)や菓子鉢から、各自がとりますが、本日は懐紙にのせたお菓子をお配りします。お菓子は茶筌とおし(茶筌を茶碗の中で洗う動作)のあたりから食べ始め、お茶が出るまでには食べ終わります。



西村圭介 (日高市)

・お茶

亭主(お茶を点てる人)の点てたお茶は釜の横に出され、客はそれを取りに出ます。が、本日は半東(お手伝いする人)がお持ちします。



萩 焼

・お茶の飲み方

一旦自分の前に来たお茶を左隣の人の間において、「お先に」と言って、また自分の前に置き、お茶碗を囲むように畳に両手をついて、「お点前ちようだいいたします」と言い、お茶碗を取り上げて、少し掲げてお茶に感謝して、お茶碗の正面を避けて、飲みます。

よく、3口半で、と言いますが、何口で飲んでもかまいません。最後まで飲みきります。

・お茶碗をまわすということ

お茶碗には、それぞれ正面があり、正面を避けて飲むことからお茶碗を回すこととなります。正面を時計の6時としますと、3時のところから飲むことになるので、45度ずつ時計回りに2回動かすこととなります。正面がわかりにくいお茶碗もありますが、出された所が正面となります。



黒楽
佐藤笑喜（清瀬市）

・お茶碗の拝見について

お茶碗は亭主がお客様のおもてなしに特に選んだものですので、「拝見」するのが習いです。

飲み終わったお茶碗は、また正面を自分の前に戻します。まず、畳に置いたまま上から拝見します。次に膝に肘をつき、低い位置で取り上げて正面、側面、裏側(高台や印判)を見て、質問や感想を述べたりします。(黙っていてもかまいません)低い位置で見るのは万が一お茶碗が手からはずれてころころしても割れないようにという心遣いです。一通り拝見したら、また、畳の上に置き、上から拝見して(なごりの拝見)、正面を亭主のほうに向けて前に出します。

となりの人の茶碗を拝見したい時は、隣の人が拝見し終わったのを見極めて、ちょっととなりの人に向き、手をついて、「お茶碗の拝見をお願いします」といい、お借りして上記のように拝見します。お茶碗は畳の上を引きずらずに移動させます。本日は主客のお茶碗だけ仕舞いのお点前のために先に回収いたします。



佐藤笑喜（清瀬市）

・仕舞の点前

主客のお茶碗を回収して、おしまいの点前をします。

亭主がお茶碗、棗、建水を水屋にもどし、茶道口で礼をしますので、総礼して一通りの終わりになります。



佐藤笑喜（清瀬市）

・茶湯における「おもてなし」とは、

お茶では、亭主がなにからなにまで、お客様にして差し上げるのが「おもてなし」ではなく、例えばお菓子もお客様同士で取り分ける、とか、お茶も釜の横に出されたのをとりに行くとか戻すとか、の手順になっており、それを主客同格といいます。そして、それが互いに進行を助け合うようになっています。それはお互い招いたり招かれたりのことなので、気遣ってできるからでもあります。したがってお茶のお稽古はまずお客様のお稽古から入ります。先生や先輩がお茶を点ててくれまして、お菓子を食べていけばいいのですが、この段階で隣に挨拶するとか、上客を気遣うとか、お茶碗(大切な物)の取扱を学ばなければなりません。(現代の万事簡略の頭を切り替えるのはなかなか難しいものです。)



石川英輔（日高市）



珈琲豆を練り込んだ茶碗

・茶湯に関心を持たれたら、次のような書籍はいかがでしょうか。

■「茶の本」岡倉天心(明治に書かれた、日本文化を茶道を通して紹介した)
(原文は英文)

■「千利休その人と芸術」村井康彦/ふくろうの本(河出書房新社)

■「もしも利休があなたを招いたら茶の湯に学ぶ`逆説`のもてなし」千宗屋
(角川 one テーマ 21)



伊集院真理子（鎌倉市）

＜室町文化と茶湯の成り立ち＞

喫茶の歴史は平安時代に始まるが、いわゆる茶湯は 14 世紀半ばに成立しました。僧栄西によって抹茶法が伝えられてから1世紀以上たってからのことでした。

中国との交流によりもたらされた唐物が鎌倉幕府末期からいわゆる唐物数寄として昂揚し、時代が代わりこうした唐物の蒐集に最も熱心だったのが足利將軍家でした。ことに足利義満は熱心で後に東山御物と称され唐物の宝庫となりました。

唐物数寄はそれを観賞するため畳を敷き詰め、床の間、違い棚をもった書院座敷を生み、それに適した坐礼の茶礼になりました。茶湯の和風化となり、のちの日本人の生活美学の母胎となりました。

こうした書院茶湯の様式は 15 世紀の半ば、將軍義教の頃に確立したと考えられています。応仁文明の乱前後から四畳半座敷に対する関心の高まりがあり、四畳半が「方丈間」ともいわれたように遁世者の求めた山里の草庵の大きさを象徴し、脱俗、非日常の空間であることに意味するようになりました(文学的には「方丈記」など)。この脱俗の空間には身分の上下はないということで、町民の間にも茶湯が広まりました。

また四畳半指向と相応するように唐物一辺倒から和物の素朴な美に関心が向けられるようになりました。これは枯淡の美と呼ばれています。16 世紀になり、高麗物の井戸茶碗の美意識が愛好されるようになりました。

遁世者は山里にあるが、四畳半に象徴される脱俗の空間は人里、都市のなかにあり、日常生活の中にとり込まれた草庵として`市中の山居`という理念となり、この理念は茶湯が都市の美意識の所産であり、典型的な都市文化として広まりました。

＜千利休～現代＞

利休は、現在の堺市に 16 世紀のはじめに生まれました。14 歳ではじめ北向道陳に学び、師の推薦でこの時期茶湯界を領導していた武野紹鷗(茶湯の形式と内実を整えた人物)の門に入りました。草案茶湯の理念は武野紹鷗によって確立されたと言ってもよく、第一人者でした。また武野紹鷗は、南宗寺に参禅し、以降における茶人の参禅、茶湯の禅宗化をもたらすようになりました。

こうして千利休は 10 代後半で茶の道に入りました。記録の上で茶会にその名が登場するのは、天文 13 年(1544 年)のことで、利休は 23 歳でした。以後利休は堺の町人仲間をはじめ僧侶武將などと交歓しています。この時代は茶会によって作られる人と人との連環が互いの知識やセンスを磨く役割を果たしていました。利休が師と仰ぐ武野紹鷗が弘治元年(1555 年)10 月に 54 歳で没しています。このあと茶湯界は、このとき 34 歳であつた利休ら第 2 世代に受け継がれていくことになります。

天下統一を目指していた織田信長が入京する永禄 11 年(1568 年)9 月、足利義昭を擁して岐阜から上洛しました。この上洛は政治や軍事の面はもとより、茶湯の世界にも極めて大きな影響を及ぼすことになりました。堺では当初抗戦論が強かったが、年が明けると一転して和平論に傾きました。その中心が今井宗久であり、津田宗及や利休でした。

信長はその後上洛のつど大寺院に京、堺の町人を招いて茶会を催していますが、その中心的な役割を果たすのが宗久であり、宗及、利休でした。

利休は信長の茶頭としては三番手でしたが、信長の死後、秀吉に重用され 70 歳で死を賜るまで、茶湯を通して政治にかかわりました。その人生はさまざまな小説、映画となっています。

利休は、武野紹鷗の確立した茶湯の様式を発展させつつ、確立し、かつ四畳半であった茶室を、三畳、二畳、一畳半にまで、狭くすることにより、また革新的でもありました。時代は戦国でありますから、この濃密な空間はただ茶湯をたしなむものではなく、互いに心をさらけ出し、腹をさぐるトップレベルの密談の場であったことは間違いありません。政治に関わることを避けられなかった利休は、それを茶湯の革新性へと昇華させていったと思います。

利休の死後、一時利休の弟子たちは息を潜めましたが、茶湯の文化は残り(名物は新たな権力者たちの所有となった)大名、武士、豪商のあいだで受け継がれました。

明治以降、実業界の名士たちにより、(益田鈍翁、松永耳庵、野崎幻庵など小田原三茶人といわれる)西洋文化に負けない優れた日本の伝統文化として再評価され近代の合理的な発想などの新しい思想を積極的に取り入れて、より自由な茶の湯のあり方を志向しました。また、茶道具や古美術品の蒐集もされました。

学校教育でも(特に女学校では)茶道が行儀作法の一環として取り入れられました。

しかし、太平洋戦争が終わると他の伝統的な文化と同様に、排斥され、古臭いものとして封じられていったように思います。

今日茶湯をする人は高齢化の一途を辿っており、その行く末が案じられています。

一方で、新鮮なものを感じ取り入れようとする少数の動きもあるようです。

今一度、茶湯の成り立ちに立ち返り、市中の山居として日常の中の非日常を楽しめれば、幸いと思います。

<私と茶湯の出会い>

たぶん10年以上前になると思いますが、日経新聞の夕刊のコラム(経済界の方が1週間づつ担当して、日常、身辺雑記、思い出などを書いています)に「お茶なんて、(こう)あるべきだ。」と書いていらっしゃいました。それは、まず、雑巾をしぼり部屋のすみずみまで、拭き清める。掛け軸なんていない、新聞紙に「無」とでも描いて壁に貼るがいい。花はその辺から摘んできて、牛乳瓶にでも挿せばいい、利休も花は野にあるように生けよ、と言ったではないか。茶碗はその辺の飯碗でいい、ただこころ静かに茶を点てればいいのではないかと。と、、、これを読み、直感的に素晴らしいと思いました。お茶ってこうなんだ、と。私も茶道はただ古臭くて堅苦しくて、足しびれるし、かなわないな、と思っていましたが、なんて新鮮な捕らえ方！と感動しました。(残念ながら書いた人を忘れてしまいました。)それで、周囲の人にこの話をし、お茶習いたいんだけど、と相談しましたが、みなさん、お茶の世界はあなたが思っているような所ではないから、とおっしゃるのです。

それから数年たちました。6年前、きもの関係でお知り合いになった飯岡さんが、千住宗琇先生に習っており、新座市の睡足軒お茶会を開きました。千住宗琇先生は、清瀬市の台田団地の5階に住んでおり、その1室を茶室に改造し、空中茶室として楽しんでいらっしゃいました。着物の友達とそのお茶会に参加したところ、先生が利休さんのことを話されて、その気持ちに立ち返り、お茶を楽しみましょう。とおっしゃいました。ほとんどが初参加の人でしたが、一人一人に席入り、床の間の拝見、お菓子の取り方、など丁寧に教えてくださいました。その清々しいお姿に接し、弟子入りいたしました。以来いろいろなことがありながらも何とかお稽古を続けておりますが、いつも千住先生が、お茶の原点をみつめ、生き方を考える、お茶の動作を通して無駄のない立ち居振る舞いを身につける、お茶の合理性をみつめ原点に帰る、ことを繰り返しておっしゃってくれます。先生自身八十数年の人生の中で培われたものをお茶を通して、伝えようとしていらっしゃる真摯なお姿が、私の求めていたお茶に重なっています。まだ言葉にできないいろいろなことがありますが、「ただ静かにお茶を点てればいい」という境地になるまで続けられるといいと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。

(平成25年2月17日岡田寿美子)

・主客と連客――主客(お正客)を決め、それ以外の方は連客になります。お正客は亭主の点てたお茶を飲みます。せりふのやりとりがあります。連客には、奥から点てたお茶が運ばれます。

・席入り

席入りは、茶室の前で扇子を前にして手をつき、部屋のなかを、ざっとうかがいます。(ここでは礼をしません) 扇子を右手で持ち、茶室の中には、にじって(両の手を握りこぶしにし、両側につき、膝を進める)入ります。体が入ったら、扇子を膝前に置き、主客に向かって一礼をします。(このときは、あまりじろじろ見ません。ご一緒させていただきます、というような気持です。)扇子を右手で持ち、床の間に向かって歩きます。よく畳の縁(へり)を踏まないように、といわれますが、これは縁が傷まないようにという、心遣いです。

・床の間の拝見

床の間の30センチくらい前に座り、扇子を前に置き、見る前に一礼します。顔を上げて掛け軸を拝見します。次に縁周りを見ます。花を見ます。花器を見ます。最後にもう一度掛け軸を見ます。(なごりの拝見、と言います。)一礼して、扇子を右手で持ち、立って、自分の席に向かって歩きます。本日は座る所に座布団を置きました。お茶席によっては、お釜の拝見などあることもあり、前の人に習ってします。

・お茶の飲み方

一旦自分の前に来たお茶を左隣の人の間において、「お先に」と言っ
て、また自分の前に置き、お茶碗を囲むように畳に両手をついて、
「お点前ちょうだいいたします」と言い、お茶碗を取り上げて、少し掲げ
てお茶に感謝して、お茶碗の正面を避けて、飲みます。
よく、3口半で、と言いますが、何口で飲んでもかまいません。最後まで
飲みきります。

・お茶碗をまわすということ

お茶碗には、それぞれ正面があり、正面を避けて飲むことからお茶碗を回すことになります。正面を時計の6時としますと、3時のところから飲むことになるので、45度ずつ時計回りに2回動かすことになります。正面がわかりにくいお茶碗もありますが、出された所が正面となります。

・お茶碗の拝見について

お茶碗は亭主がお客様のおもてなしに特に選んだものですので、「拝見」するのが習いです。飲み終わったお茶碗は、また正面を自分の前に戻します。まず、畳に置いたまま上から拝見します。次に膝に肘をつき、低い位置で取り上げて正面、側面、裏側(高台や印判)を見て、質問や感想を述べたりします。(黙っていてもかまいません)低い位置で見るのは万が一お茶碗が手からはずれてころころしても割れないようにという心遣いです。一通り拝見したら、また、畳の上に置き、上から拝見して(なごりの拝見)、正面を亭主のほうに向けて前に出します。
となりの人の茶碗を拝見したい時は、隣の人が拝見し終わったのを見極めて、ちょっととなりの人に向き、手をついて、「お茶碗の拝見をお願いします」といい、お借りして上記のように拝見します。お茶碗は畳の上を引きずらずに移動させます。
本日は主客のお茶碗だけ仕舞いのお点前のために先に回収いたします。